

中山義秀
芹沢光治良

新潮社版

中山 義 秀
芹 沢 光 治 良

発行／1967年9月15日 十一刷／1969年9月25日

発行者／佐藤亮一 東京都新宿区矢来町71

発行所／株式会社・新潮社 東京都新宿区矢来町71

電話東京(260)1111(大代) 振替東京808 郵便番号162

印刷所／大日本印刷株式会社 製本所／新宿加藤製本所

本文用紙／本州製紙株式会社

函貼／三菱製紙株式会社 製函／文京紙器株式会社

カバー・扉・見返／特種製紙株式会社

表紙クロス／日本クロス工業株式会社

目次

中山義秀

厚物咲

碑

テナヤンの末日

月魄

少年死刑囚

寂光の人

露命

五

三

七

一九

一四

一五

三五

芹沢光治良

愛と知と悲しみと

注 解
年 譜
解 説

瀬沼茂樹

二六五
四三九
四四五
四七七

中山義秀

厚物あつもの咲さき

瀬谷は七十の声を無視し最早もはや世事一切を流れてまかした気持でいながら、やはり心気とみに衰えはじめたことを感じないわけにはゆかない。頭は冴え永年手がけた仕事に何の困難を覚えるのではないけれども、ともするとはて知らぬ放心に陥っている自分にしばしば愕おどろくことがある。七十年の生涯をふり顧かえってみると溜たろ桶おけの蛆虫うごむしが桶の壁を攀よじ登のぼっては落ち、攀よじ登のぼっては落ちして依然として汚物の中から脱ぬけでられなかつた姿の厭いとわしさが考えられる。かの悲哀とか寂寥せみりようとかいふものではなかつた。自分の人生そのものが舌打ちした**いばかりいまましかつたのである。**

その思いは朝から一碗の茶を給されたなり抛なつておかれながら、じつと同じ新聞を読み続けている片野の姿に気がつくと、燃えあがるように一層じりじりして

くるのである。片野は瀬谷と同年でありながら、頭髮はまだ若者のように黒い。面長おもながな顔の皮膚は品よくつやつやと輝いている。そして眼鏡をかけずに細い活字の新聞を、いつまでも根気よく読み続けていることが出来るのだ。瀬谷と片野とが金鉞かねせきを探して、全国の山をめぐり歩いた四十台の頃と片野は殆んど少しも変わっていない。驚くべき強韌きやうじんな生活力だと不思議がられるばかりである。

それは瀬谷と片野との生活の相違のためであろうか。瀬谷は区裁判所前のごみごみした路地内に住み片野は町の郊外にゐる。瀬谷は朝から晩まで机の前に坐つて代書業をこつこつと営んでいるのだが、片野は東南を開いた山の傾斜に果樹園を作つて終日日光の中に働いているのである。もっとも生活の程度はどちらも同じである。瀬谷は昔弁護士の試験に努力しただけあって、あらゆる訴訟事務に詳しく町内随一の名代書人の評判をとっているが、半紙一枚拾錢程度の代書の収入はしれたものである。片野は桃・苺いちご・桜さくらんぼ・葡萄ぶどう・梨なし等を栽培しているけれども、老人一人の仕事でぼつぼつと町に売り出しにくるのだから、寧ろ瀬谷の

取入には及ばないくらいだ。

昔を思えば兩人ともに落ちぶれはてたものである。

瀬谷の実家は大きな木綿問屋だった。片野は瀬谷の町から一里ほど隔った村の酒造家の旦那だったのである。寺子屋式の学校で二人は知合った。それから二人は遠く旧藩の塾に遊学した。二人は秀才だったにも拘らず士族の子弟達に制されて、驥足をのばす事が出来なかつた。二人は夢破れて帰ってきた。片野はそのまま養家に居つき、瀬谷は東京へ出奔した。実家の父の反対を押切ったのだから、瀬谷は一切実家の助けをうけず苦学した。車夫、新聞配達人などの不規則で苦しい生活は、彼の健康を害し頭をそこねた。病弱な長兄の死で瀬谷は空しく帰郷し稼業を継いだ。老父が歿すると瀬谷は、同じく養父を喪って独立していた片野と組んで、さらに大きな夢を描き全国の山々を金を探して歩きまわった。金は発見出来ず稼業は時勢におされて没落した。今度は片野が夫婦連れで上京した。五十歳を過ぎた夫婦は結局都会生活の苦渋をしたたか味わったばかりで帰って来た。故郷に帰って来て家はなく僅かに残った持山の斜面を拓いて果樹園にし、麓に

仮小屋を建てて其処に住みついた。その間瀬谷は路地内の長屋で、ずっと代書業を営みつづけていたのである。

二人の生涯はザッとこんなものだ。彼等は相應に賑かな夢を見ようとして、夢の殻ばかりを掴まされたわけである。時勢の波は常に彼等の背を追い越してすぎた。しかし瀬谷が片野を側に見てじりじりするのには、あながち敗亡の分身を彼に見出すためではない。また瀬谷自身の内部の衰えにも拘らず、この生涯の友が底知れぬ若さを秘めている故の嫉妬でもなかつた。瀬谷は片野に三十円ほど借りがあつた。九年前娘が嫁入りする時の支度金に借りたものである。ほんの好意のつもりで返済の期間も利子も定めてなかつた。証文さえも入れていなかった。瀬谷は自分の誠実を信じ、片野もまた友を信用していたからである。片野は瀬谷の生活の苦しさを考えて、毎月一円ずつを友から取立てた。月の五日十五日二十五日と三度朝早々から瀬谷の家にやってきて、その時々都合次第、有ればよし無ければまたやってくるという至極気軽な態度で新聞を読んでいるのである。瀬谷はこうした片野の寛容さに

感謝した。

九年の間には片野の身の上にはいろいろと痛ましい変動があった。貧窮のうちに老妻が死に、小さい時から他家へ奉公にやっていた一人息子が家へ帰って間もなく戦争に行き、負傷して帰ってくると片野は後妻を迎えていた。息子は第二の母の若さに遠慮して家を出て行き後妻もまた大酒を飲んだ末一年ばかりで老人を見棄て行方をくらましてしまった。片野は孤独になった。変らないのは彼が月の五の日に三度、欠かさず朝から新聞を持って瀬谷の家へ一円の金を取立てに来ることである。九年間といえれば既に元金の三倍以上を支払っている訳である。一年に十二円、三年で三十六円、九年で百八円。

瀬谷には友の心が解らなかつた。同時にまたそうと知って九年間も払いつづけている瀬谷自身の気持の始末もつかかなかつた。瀬谷は弱気な自分を顧み、今更のよりに片野の取立ての巧妙さに驚かざるをえない。

「片野君、今日は駄目だ。帰って下さい」

と瀬谷が不機嫌な心を思いきって口に出して云うと、四時間でも五時間でも辛抱強く同じ新聞を繰り返

し読みふけっている片野は、「ほう」という風に顔をあげて忽ち穏やかな微笑を浮べながら、

「では、この次またお伺いしましょう。どうせ、遊びついでなのだから」

そう云ってあっさり帰って行く片野に、それ以上強い言葉を出すことができなかつた。またこの次にと思つて延ばしている、次に来た時には向うから何も云い出さないかぎり、やはりこちらから思いきつて切り出すことができなかつた。独りで苛々している間に三時間経ち四時間経ち、つい瘤癩が起きてしまうのである。

その心理の葛藤が厭さに手元に幾らかでも余裕があれば、なに一元ぐらいと思つて出してやる。そして九年間続いて来た。今では貸借りの関係よりも月ぎめ一円の小遣でもやるような習慣になつてきている。片野もそのつもりらしい。金銭の貸し借りは一時だが、借りた恩は永久だとすれば、片野は金も恩も永久に貸したつもりでいるのである。返済の期限や利子を定めた証書を取交して置かなかつたのが、つまり瀬谷の重大な手落ちだったのだ。瀬谷も代書業をしていてそれくらゐの事に気づかぬ筈はない。当時彼は娘の嫁入りや何

やかやでひどく生活が苦しかった。返済の期限をきめてもちゃんと払えるかどうか自信がなかった。月一円としてくれたのは片野の好意である。その好意に対して水臭く月一円宛何年間に返済などと証書を出す訳にはゆかない。片野も要求しないので暗黙の間に彼の友情をうけたつもりでいた。今になってみれば片野の友情は瀬谷を陥し入れる奸策だったことになる。片野は果して最初からそうした腹だったのであろうか。

瀬谷は近頃七十の声がしきりに頭にかかってくるにつけても、この際片野との貸借関係をはっきりして置いた方がよいと漸く決心した。彼の弱気にまかせていれば片野の生きている限り借金を払いつづけなければならぬ。しかも片野がまだ四十代の人間のようにつやつやしていることを考えると、瀬谷の手では払い終らず妻や娘の上にも及んでくるかも知れないのである。これ迄の片野の遣り方を思えば、瀬谷の亡きあと片野は随分彼の遺族の手からも金を取り続けかねない。

「ねえ、片野君。借金の方はもういい加減、勘弁していただくじゃないか。今年で九年間払いつづけて来

た訳だからね。月一円にして百円なにがし、利子とも充分な筈ですよ」

すると片野は吃驚したように新聞から顔を離して、「へえ、もうそんなになりますかね。つい昨日のような気もするけど」

「冗談じゃありませんよ。郁子の嫁入りの時ですからね。その年生れた孫が、もう十になっておりますよ」

「どうも証文をいただいた訳でもないものだから、頭が耄碌しちゃまって。それに瀬谷さん、私もこの年にたりたった一人で生活が苦しいものですからねえ。月々の小遣に実はこちらさんを頼みにしているのですよ。あの時は貴方に金をあげたつもりだったが、貴方がお堅く一円ずつでも払うと仰有るものだから、それがすっかり癖になっちゃまいましてね。これは困った。どうも困ったことになったな」

「いや貴方がお困りなら、私もあの時お世話になったのだから、一円ぐらいどうにでもしますよ。しかし、はつきりするところは瞭つきりしておかんとね」

「そうですとも、そうですとも。ほほう、九年経ちますかなあ。あれから女房に死なれ、子供には逃げられ

て、ああ私にしてみるとまるで夢のようですわい。長生きはしたくないものだ、この頃になって我が身が沁々しみじみと情無くなりませう」

瀬谷には片野のこうした口調の話が苦手にがてだった。片野の愚痴ぐちがこれから長々と続くからである。そして妻あり子あり孫ある瀬谷の境遇を無上の生活のように羨み、彼と較べて自身の孤独を啣くちつ口の下から友の無情を恨むような口吻くちふんをたらたらと洩もらし始める。竹馬たけうま頃からの友として明日をも知れぬ齡よの片野を、孤独に見棄すておく手はないというのである。では家を出た彼の一人息子を連れ戻してくるよう頼んでいるのかと思ふと、片野は子供の事などよりも後添あとぞいの女をほしがっているのだ。これには瀬谷は啞然あぜんとした。片野はもつともらしく老後の寂しさを慰める茶のみ友達などというけれど、決してそんな風雅な欲望ではないことはこの前の例で解とっているからである。四十年余連れ添そった片野の老妻が亡なくなるに彼は早速後をほしがった。瀬谷も彼から頼まれる迄もなく心にかけて探し廻まわったが、なかなか適当てきとうした老女が無い。四十過ぎ五十歳とほどの寡婦くわふがまるきり無いわけではないけれども、

片野の生活や氣質きせきを承知しやうちで来てくれる者が無いのである。そのうち片野は自分の手で、娘といつてもいい三十台との女を家庭へ連れ込んだ。長く女郎ぢやうらうをやり廃業はいげつしてからは町の或る隠居いんきよの妾めかけになつていた女である。そして一年ばかりで女に逃げられてしまった。大酒を飲んだその阿婆あば擦ずれ女が時々片野を罵ののした言葉が、瀬谷の記憶きおくに今でもあざやかに残のこっている。

「こんなシツコしつこイ爺じいイいたらありやしないう。一日だつて私をらくにしちや置おかないんだからねえ」

女が片野を愛していたなら、そう汚きたくは云いうまい。片野は女から嫌きらわれそして矚なされたのである。しかも逃げた女を探し廻まわる片野の狂態きやうたいは、はた目に浅間せんげんしいばかりだった。件せがれが家出した場合は冷淡れんたんというよりも、寧せまろ女と唯ただ二人ふたりっきりの同棲どうせい生活せいかつのために却かえって喜よろこんでいたくらいだった。

だから瀬谷は、片野の愚痴ぐちには相手あいてになるまいとつとめた。そのためには金を出してやるか、片野が年々丹精たんせいをこめている菊の話に話題わだかまを転まじるよりほかはない。菊の事になると長尻ながしりの片野も、急に留守くす守しのことが気きにかかつてそわそわと帰りかける。片野の菊は町の

名物だった。毎年秋に催される町の展覧会で、片野の出品はいつも一頭地をぬいていた。彼は小心で吝嗇な性質のくせに、ふしぎと菊は大菊作りに限りその中でも花卉のがつしり盛上って雄渾な味いのする平弁の厚物咲と管弁の太管咲の二種にきまっていた。彼が会場へ出品する二三鉢は、ただならぬ気品と生彩とをはなち群花を圧してしまふのである。よろずに物惜しみする片野は菊の苗にかけては殊にひどく、その方の好事家連とは随分高値で取引きしているらしい。実は瀬谷も老後の手すさびかたがた菊作りには眼がなく、片野の菊苗には垂涎おく能わざる次第で、彼が九年間無駄に金を払いつづけてきた鷹揚さの裏には、なにとぞして片野から良き菊苗を手に入れたい、菊作りの秘訣の伝授にあずかりたいという下心が、無意識の間にしろ働いていなかっただとは云えないかもしれないのだ。しかし片野が時たま配けてくれる菊苗に、ろくな物のあった例しはなかつた。此度こそ、此度こそはと期待に燃え、肥料に心をこらし手をつくして、結局腹立たしい思いをなめさされる。しかも片野は決して苗が悪かつたとは云わない。培養土や栽培法について、瀬谷の

やり方に難癖をつけてしまふのである。

片野が帰った後は妙に気色が悪かつた。片野のため苛々させられた胸の濁りが容易に澄まないのである。年齢の重みを感じる事ひとしお深くなったこの頃は殊にこらえ性がなく、片野に抱く瀬谷の感情は体内でぼ

っぼっと焔するほどに強かつた。金の事といい菊苗の事といい、また己の不幸や孤独をたてに他人にのみ期待する片野の虫の好きは、これが六十年來の友人といえるだろうかと瀬谷は片野を腹立ち憎みたくなる。巷に埋れつくした瀬谷の身にとっては友の善悪は最早問題ではなかつた。ただ老いの身を互に劬りあうような心友が欲しい。己の生涯とともに片野との六十年の交遊もまた空しかつたことを考え、片野のような人間と結び合わされた宿命を思うと瀬谷は二重にいまましくなってくるのだつた。

こうした片野の性格を更めて見直すにつけ、歩いてきた生活の道が人間に加える変化の跡に愕かれる。少年の時分の片野は、なめらかな果実の緑の肌のように美しく、温順で人々から愛され他人にも親切だつた。彼は七つの時養家に貰われてきたのである。片野の生

家は宿場の本陣で、養家とは姻戚関係になつていた。生家も養家も旧家を誇る家柄で、どちらも大勢の奉公人たちを使つていた。両家は城下町を中にして六里ばかり隔てた山間の在所にあつた。片野は親の許を離れるのを厭がったが、城下町で武士の児が差すような小さな刀を買つてやろうとなだめすかして、彼の父親自身六里の道を養家へ二頭の馬で送つてきた。町で父から刀を買つて貰うと片野はすっかり元氣づいて、反対に父の馬の歩みを急がせる様になつた。すると彼の父親は馬上に喜び勇んでゐる可愛い三男の我が子を、人にくれてやるのが急に惜しくなつてきた。

父子はこの山を越えれば養家へは半里ばかりという峠の頂で、馬を休ませかたがた路傍に下りて息子に菓子を喰べさせた。山々は今が躑躅の真盛りの、崖には藤が花房をたれている若葉の季節である。脚下の谷間では鶯が啼いていた。父親は煙草を一服喫んでは我が子の姿を眺め、二服喫んではまた眺めしていたが、とうとう、俊坊よ、母の家へ帰りたくはないかとカマをかけてみた。ところが片野は頭をふつて、刀を買つて貰つたからは約束通り養子に行くと答えたそうであ

る。つまり片野俊三はそんな子供の時分からして律儀者だつたわけだ。青年となり瀬谷と一緒に藩塾に遊学してゐた時にも彼のこの性質は変らなかつた。二人は真面目に漢学を勉強した。塾生達がぬけ遊びする放蕩にも加わらなかつた。殊に美貌の片野は誘惑される機会も多かつたであらうが堅固に身を持した。彼は美貌であるためにかえつてすべての女性を軽視してゐた傾きさえあつた。

遊学から失望して帰つてくると、片野は養父母が選んでくれた美しくもない女と結婚して、やかましかつた養父の命に唯々諾々としながら小まめに働いた。彼は街道筋に大きな宿屋稼業を営んでゐる客商売の彼の実家より、酒造りの養家の方を稼業の格が上のように考へてゐた。それ故瀬谷が東京へ出奔する秘密を打ち明けた時にも、片野は酒屋の若主人の地位の誇らしさにさして心を動かされた風も見えなかつた。

瀬谷は数年間の東京生活を憶うと、悪夢の中を彷徨してゐたやうな感情に憑かれる。大都會の生活はじつに多様複雑で、彼は竟にその性格を掴むこともそれに同化するともできなかつた。彼はぎりぎりのところ

まで辛抱したし闘いもした。しかし彼はまるで空虚を相手にして戦ったように、彼のすべての努力は空しかった。田舎や藩の塾にいた時には、あれほど鋭く生き生きと働いていた彼の頭脳は麻痺したように動かなくなってしまった。彼が労働の苦学生生活からやっと脱け出て代言人の書生に住み込み兎も角も勉強に専心出来るようになった時、彼はその恐ろしい悲しみを満喫した。彼は昼の勤めが終ると夜を徹するばかりにして六法全書と格闘しつづけたのである。しかし法典はつめたい恋人のようにいつも彼の頭脳の外にあった。彼は喰ったり喰わなかったりした不規則な苦学生生活のために、ひどく胃をそこねていた。彼は漢方医が調合してくれる安価な煎薬を持薬にして服んでいた。玄関に近い北向きの三畳の彼の部屋は、土瓶で煎じているその持薬の鼻持ちならぬ臭気がいつも充満していて下女さえも彼の所には近づかなかつた。彼だけがその激しい臭いの中に無感覚に毎日毎日必死に法典を誦誦しつづけていたのである。

過労が瀬谷をおとろえさせた。そのため彼は女性に無関心であることができた。彼の顔の皮膚は灰のよう

に濁っていた。眼は飛びだして鋭かった。頭髮は脱けおち、地肌が白くすいて見えた。一度二度三度と弁護士試験の数を空しく重ねてゆくにしたがって、彼にとり試験は業苦にちかいものとなった。恐怖と不安のため彼は受験場では全くの痴呆者だった。日々夜々誦誦しつづけた条文の一行すら思いだすことができなかつた。彼は脂汗をたらして時間一杯を最後まで苦しめ、とうとう白紙を出した。そして外見だけは昂然と場外まで歩いて来て不意にばったりと倒れた。

それでも瀬谷は、受験を思いきること出来なければ、また自分に絶望することもなかつた。反対に彼は愈々闘志を奮いおこし、悲愴な信念の下に更に翌年の試験を目ざして邁進した。彼の兄が死に家人が強いて彼を郷里へ引戻したのでなかつたならば、彼はおそらく試験のために狂人となるか命を失うかしたに相違ない。彼は都会生活で破壊された健康と頭脳を恢復するのに長くかかった。彼が長い悪夢からさめたように漸く自分自身をはっきりと意識しはじめた時に、彼の老父が死に間もなく母も亡くなった。番頭が彼に代つて稼業をみた。彼は再び自由になった。しかし彼は二度

と出京しようとは企てなかった。彼は都会の土では萎れ、郷土でやっと息を吹き返すかの植物にも似た自分の宿命を観念した。

瀬谷直人は結婚して郷里の市井の人となった。日露戦役後のブウムに煽られた鉱山熱に駆られて、片野と一緒に金鉱をたずね歩いた。彼等が奥州の山間に行つた時である。山を案内してくれる筈の土地のブローカーが留守で、彼の妻君が代りに彼を金山へ先導した。彼等はその妻君の美しさに吃驚した。鄙には稀なというけれど、彼女は単に美しいばかりではなく滴るばかりに色気があった。金は麗水より生じ、玉は崑岡より出ず。そういう昔藩の塾で習い憶えた句に新しい意義を附加しながら片野は彼女にすっかり夢中になってしまった。事実また駅から十六里もある人煙とぼしい片山里に、そうした美人を見出したことは奇蹟のように思われた。由来その地方は平家の落人の後裔と称して、京型の美人が多いということを噂に聞いていたけれど、目のあたりそれに接してみると瀬谷にしる心を動かさずにはいられなかった。物馴れた起居振舞いから判断すると、年は二十八九歳にもなっているのであ

らうが、清冽な山間の気は少しも彼女の麗質を衰えさせてはいず、かえって年増ざかりの熟したみずみずしさが生地のままな新鮮さであらわに強く迫ってきた。

彼女の家は普通の農家ではなかった。街道筋にひらかれているささやかな茶店風の家だった。往来から土間へ這入るとすぐ炬がきつてあり、店には駄菓子や少しばかりの清涼水の瓶、鐘話などが並べられ、土間には酒樽が据えてあった。蚕も飼つてあるとみえて階段口から覗かれる二階は蚕室になっていた。二人は其処へ午前の十一時頃に著いた。女は櫓火の灰を防ぐために頭髮は手拭でつつみ、モンペをはいた膝を斜めに色めかしく横坐りして、炬端にただ一人昼餉の汁を煮ていたが、彼等の来訪を予期していたものとみえて、二人が店へ這入つて来たのを見ると頭の手拭をとつてにっこり愛想笑いをもらした。二人はその刹那呀々と眼をみはる思いがした。山家風のつくりわぬ装いの中から突然現れでた彼女の明眸皓齒は、ひと眼で二人の感情を魅しさってしまったのである。女は良人が親戚の不幸で急に留守しなければならなくなった言い訳をして、二人に昼飯を饗応した。

「一本おつけ致しやすかなし」と女が銚子を持って気軽に土間の酒樽の方へ立ちかかると、瀨谷がとめた。瀨谷も片野も酒に弱かったので、酔っては折角の山の検分ができぬと思つたからである。片野は側で一本ぐらい宜いではないかという顔附をしていたが、別に何とも云わなかつた。昼食後二人は女の案内で山へ出かけた。女はその儘の服装に夏の陽ざしをさけるため菅笠をかぶつた。その姿がまた妙になまめかしかつた。金が出るという山迄は一里余りあつた。途中片野は何彼と冗談を云つて女を笑わした。生真面目な彼にしては珍らしいことだつた。

女は先ず試掘しかけて落磐のためにその儘抛棄してしまつたらしい廃坑へ、二人を案内した。そして廃石の間から鉱石らしい物を拾ひあげて二人の試料入れ袋におさめた。それから木立の茂みを分け二カ所ばかりあつた露頭を見せた。二人は探鉱鏡で露頭を欠いて袋に入れた。女は更に下の谷間を指して崖縁の粘土鍾があるから見ないかと云つた。彼等が沢へ降りてみると、粘土鍾の方々に穴が穿たれてあつた。

「家の人が此処の試掘権を取る前村の人が金粉が出る

云うてあんな悪さをしただからなし」

「ほう、金粉が採れたんですかい」

「今でも少しはあつかも知れねえだわし」

女は片野にそう云うと懐からお腕をとりだして白い粘土をかき入れ、モンペを脱いで裾をたぐり白く豊かな脛を見せながら沢の水でそれを溶いた。谷間の青葉を透かして落ちてくる日光が女の手許の水に揺らぎ、清水にひたつた女の足形を、青いばかりにくつきりと描きだした。眼も魂も吸われるほど美しくあざやかな皮膚の色だつた。やがて女が笠の上からやや汗ばむほど上氣した顔をあげて二人の方にさしだした腕の底には、なるほど彼女の云うとおり微細な金粉がほんの僅かばかりきらきらと燦いていた。

瀨谷と片野とは翌日帰ってくるという女の良人と会うために、村はずれの河原の湯宿へ泊つた。鉱区の有望らしい事を語り合つて前祝に一杯飲み早くから寝た。瀨谷が夜中にふと目ざめてみると傍の片野の寢床は空だつた。しかし深く気にもとめないでそれなり眠つてしまつた。後で聞くと片野は便所へ起きた序につかつて来たのだそうである。翌日女の亭主の方か